

A group of anime-style characters in school uniforms, with a glowing book in the foreground. The characters are arranged in a cluster, with some looking towards the viewer and others looking away. The background features a white floral pattern and dark, thorny branches. The overall style is typical of Japanese anime art.

いぼら姫
WORLD END FAIRY TALE

I

春日菊花

イラスト/壱コトコ

予言 終焉の魔女（前）

一人の女が赤子を抱き、バルコニーから今まさに沈まんとする夕陽を眺めている。山々の稜線は赤く燃え上がり、女はとある神話の、世界の終末に太陽を呑み込む役目を与えられた狼のことを思った。よくよく見れば、山の峰は獣が大きく口を開けているようにも見える。そんな想像がおかしくて、女は少しだけ笑った。背は凍るように冷たく、吹きさらされた長い髪はとぐろを巻き、白いドレスに絡みつく。

「かわいい子……」

女は腕に抱いた赤子の薔薇色の頬を撫ぜた。あたたかい。世界を満たすどんな悪意も呪いも知らず、この子は眠っている。さあ、贈り物をしましょう。

世界の隅々にまで聞こえるよう、女は高らかな声で予言する。

「この子は誰より美しくなるでしょう」

「この子を誰もが愛するでしょう」

「誰より聡明になるでしょう」

慈愛を、富を、美しい声を授かるでしょう。

そのようにして十二の贈り物を終えると、女は赤子を見つめ、うっとりとした。

「でもこの子は——、私しか愛さない」

ふくよかでやわらかい肌。赤い唇。まだ何も知らない可愛い子。

「他の誰も愛さない」

「だからこの子は永遠に、幸せになれない」

「かわいそうな子。かわいい子ね、由姫……」

女は赤子をきつく胸に抱いて蹲った。夕陽はもうすっかり獣の喉に呑み込まれ、世界に夜が訪れる。

白亜の城はいばらの蔓に深く閉ざされ、かりそめの永い眠りが始まる。

その予言をただ一人、登場を許されぬ人間が闇の帳の奥で聞いていた。

「……すっ、げー……」

見上げる風景に圧倒され、犬飼亮介はマフラーの奥、呆然と白い息を吐いた。門の向こう、丘の上にそびえ立つのは白いレンガ造りの巨大な城の一群だ。庭園の木々も尖塔も、降り積もった雪が朝日を反射して幻想的に輝いている。

ここが本当に日本なのかどうかあやしい。亮介は思わず、ここに至るまでの道のりを回想した。自宅を出て駅まで歩いて八分、そこから各駅停車で二十分、モノレールに乗り換えて十二分。さらに森の中を歩くこと十分弱。間違いない。ここは東京郊外、御園学園高等学校の入り口である。

『おまえ、入試はサテライト会場でやったんだよな。どうせ春休みで暇してんだろ、出て来いよ。案内してやる』親友の秋津久志からそんな電話があったのは昨夜遅くのことだった。中学の卒業式を終えて高校への入学を待つばかりとなったこの時期、することと言えば飼犬の散歩と姉の買い物の荷物持ちくらいだ。亮介は二つ返事で誘いを受けた。文化祭にも学校案内にも参加できなかったから、亮介が学校を訪れるのはこれが初めてのことだ。合格発表は風邪をひいてしまった自分の代わりに親友が番号を見てくれたし、入学手続きやら制服のサイズ指定は気がついたら母の手によってすっかり終わっていた。自分がぼけっとしているうちに何もかもが整っているのは昔からで、周囲が常に自分の二倍のスピードで動いているか、自分が人の二倍ムダに遠回りしているのか、どちらかだと思う。後者であれば少しだけ悲しい。それにしても肝心の親友がまだ来ていないようだ。亮介はポケットから携帯電話を取り出した。スライド式の画面に表示された時間は待ち合わせの時間を十五分も過ぎている。遅れた自分が言うのも何だが、几帳面な彼にしては珍しい。

「……、ん？」

画面に新着メールの通知が届いた。送信者は親友である。

『寝坊した。悪い、もう少し待っててくれ』

こういうのを晴天のヘキレキというのだろうか。それではこの数十年ぶりだという三月の豪雪は親友のせいなのかかもしれない。亮介は珍しく自分が優位に立った貴重な瞬間を噛み締めつつ、『わかった。俺も今来たところだし、ゆっくり来ていよ』と余裕ぶった返信をする。寒いが我慢できないほどではない。ここで待っていよう。

ざりざりと雪を踏みしめる音が聞こえたのは、その時だった。

「おお〜い」

大きく手を振って、誰かが坂を下ってくる。誰だろう。亮介は疑問に思いつつ、つられて小さく手を振り返した。

やがて近づくにつれ、それが白衣を着た男性であることがわかった。眼鏡をかけている。年齢はずいぶん若そうだ。まだ二十代だろう。

教師だろうか。

「あ！」

亮介は叫んだ。坂の途中、大振りの木の枝から今にも雪が滑り落ちそうになっている。

このままだと直撃だ。

「あ、あの、上！ 上！」

指で合図するが彼は一向に気付かない。よく見えないが、履いているのは、あれはサンダルではないだろうか。足取りが微妙な滑りを挟んで危なっかしい。

「はは。すごい雪だねー！ あ痛たっ！」

「あー……」

どさどさっと音を立てて、彼の頭上に雪が弾けた。見事なタイミングだ。

「痛ったた……。はは、やられてしまった」

よろけながらもどうにか門の前まで辿り着いた彼は、雪まみれで鷹揚に笑っている。

「僕はどうにも運がなくてね。困ったもんだね」

「あの、眼鏡」

「え？」

「眼鏡が歪んでます」

銀縁のフレームは元の形を留めることに飽いてしまったらしく、だらりと歪曲している。指先で確認した彼は、「これは困ったね」と全然困っていない顔で眼鏡を耳にかけ直した。——いいのか、そのままだ。

「いやあ、雪は素敵だね。昨日は仕事で徹夜だったんだけど、気付けば一面雪景色だろう？ いい大人がって笑われるかもしれないんだけど、興奮してしまったよ」

「確かにすごい積もりましたよね。膝まで埋まるのって、俺初めてかも。……です」

「君くらいの年齢の子だとそうかもしれないね。僕が小さい時は雪の中でかくれんぼができるくらいだった。それで、懐かしくて用務員さんと朝方この辺りで雪合戦をね。で、腕時計を無くしてしまったんだ。——ああ、あれかもしれない。ごめん、取ってくれるかな」

指さされた後方を森を振り向くと、木の根元、雪の中にきらりと光るものがある。近づいて腰を屈めてみると、それは確かに腕時計だった。ムーンフェイスだ。父が持っているものと少し似ている。

「どうぞ」

門の間から差し出すと、彼は「ありがとう」とお礼を言って時計を自分の左手首に嵌めた。

「そういえば、君は春休み中にどうしたんだい？ 部活かな。何部？ 私服のようだけど……」

「あ。えっと」

亮介は目を逸らして口ごもる。

「学校を見学できたらと思って。俺、来月からここの生徒なんです。証明するものは……。えっと、すいません、無いです。それで一緒に入学する友達とここで待ち合わせしてたんですけど、そいつが遅れてて……」

休みボケした頭が寒さでさらに鈍ったのか、説明はこの上なく怪しげなものになった。子どもみたいな言い訳に聞こえてしまっただろうか。恥ずかしくなり、亮介はマフラーに顔の半分を埋めた。

「ああ、そうなんだ。じゃあ中で待っておいで。こんな寒い中にいたら風邪を引いてしまうよ」

「え？」

「守衛さんから鍵を貰ってきたんだ。うわ、冷たいな。いよいよっ」と

ガシャン！

けたたましい音を立て、巨大な鉄の南京錠が外れた。錆びた門の片側が薄く開かれる。

「古いからこういうところもアナログだね。さ、どうぞ」

「いやでも俺、友達を……」

「歩きながらメールすればいい。門は開けておこう。ああ、そうだ言い忘れてた。僕は御園高校の看護教諭で、四宮。いわゆる『保健室の先生』ってやつだね。どうぞよろしく」

右手を差し出され、亮介も慌てて手を差し出した。触れた四宮の手はひんやりと冷たい。

「犬飼です。犬飼亮介。よろしく願います」

「犬飼君ね。近くで見るとますます、何だかテレビに出てるみたいな顔だね。今の子はほんと垢抜けてるなあ」

「テレビ？」

アカヌケテルとはどういう意味だろう。亮介が首を傾げると、四宮は声を上げて笑った。

「あはは。それにいい子みたいだ。さあ、とりあえず保健室に行こう。暖房が入ってる」

導かれ、亮介は門を潜った。

坂を登る途中で一度だけ後ろを振り返る。親友はまだ来ない。どうしてか、それがたまらなく心細かった。

ちょっと遠いけど覚悟してくれと四宮に言われた通り、校舎の玄関まで辿り着くにはおよそ二十分を要した。坂を登り切った先で亮介を迎えたのは、テーマパークでしかお目に掛かったことがない跳ね橋だ。その先には幾何学的な模様の庭園が広がっており、出口に差し掛かる頃、ようやく鐘楼のある本校舎が見えてくる。

「目の前にあるのが新校舎。左は校庭。その横にあるのが体育館。あとは温室とか湖とかいろいろあるけど、自分で探検したほうが楽しいと思うよ。迷ったらあちこちに案内板があるから、参考にするといい」

「はあ……」

思った以上の広さだ。亮介は本日二回目のため息をついた。卒業した都立の中学校の校舎が五つか六つ……、いや、比べること自体がおかしい。

「何年前だったかな。入学したての子が遭難して、大学の辺りまで迷い込んだことがあってね。幽霊に会ったとか何とか、ちょっとした騒ぎになったんだ。それで案内板をつけることにしたってわけ。犬飼君、この御園学園の土地の由来は知っているかな？」

「はい。入学案内のパンフレットと、あと友達……、今日来る親友なんですけど、そいつから聞きました。御園ザイバツのシユーチだったって」

その通り。四宮は頷き、玄関脇の下り階段へと亮介を導く。

「君の友達は何者だね。そう、この土地は元々、初代御園学園理事長である御園彰氏の持ち物だった。第一次世界大戦の後すぐだったかな、御園学園高等学校が作られたのは。その後小中学校、大学と大学病院が併設されて、今の御園学園が完成する。今の理事長は東雲詮房っていうおじいちゃん、御園家のパトロンである東雲家の末裔だ。——とまあ、歴史の勉強はこれくらいかな。ああ、そこで靴を脱いで。教職員用のスリッパを貸してあげる」

地下にあるのは下駄箱だった。在校生は普段、この入り口から校内へ入るのだろう。亮介は四宮に渡されたスリッパに履き替え、彼に倣って硬い石の階段を登る。

足元は凍えるほどに冷たく、静けさは冬の匂いがする。四宮と自分の足音以外、何の音も聞こえない。すべてが雪に埋もれて深く眠っているかのようだ。

「この上が玄関ホールだ」

踊り場を曲がった四宮の声に顔を上げると、視界が一瞬濃いオレンジ色に灼けた。

光だ。

「天井を見てご覧」

「……すごい……」

再び地上に出た亮介は息を呑んだ。

見上げる高い天蓋は一面に荘厳な絵が描かれていた。

馬車に引かれ巡る太陽と月、追いかける狼。朝から昼へ、そして夜へ。時計回りにオレンジから濃紺へと天蓋の色は変化する。

鷹が翼を広げていた。大きな蛇が木の根に絡んでいた。燃え盛る大地があり、凍りつく湖があった。距離が遠いので細かいパーツはよく見えないが、宗教画ではないようだ。お決まりの白い衣を纏った神様も、背中に羽を持つ天使もどこにもいない。

どちらかと言えば、これは——。

「ユミルの頭蓋骨」

「え？」

ぎょっとして振り返ると、四宮が小さく笑った。

「吃驚するだろう？ この玄関ホールの名前だ。通称、ユミルの頭蓋骨」

「頭蓋骨って、……ガイコツ？」

「ユミルというのは、北欧神話に出てくる巨人の名前だ。神話によると、神は殺害したユミルの身体から世界を創造したんだそうだよ」

肉から大地を、血から海を。頭蓋骨からは天を。太陽と月を浮かべて馬車に乗せ、その馬車を狼が追いかける。世界樹ユグドラシルは九つの根と枝を伸ばして生命を育み、大鷲の羽ばたきは風となって天地を駆ける。

「この絵はキリスト教の流入する以前、北欧の人々が信仰していた世界の縮図だ。宗教ではないよ、あくまで信仰だ」

「宗教と信仰って、違うんですか？」

「違う。そうだね、宗教は運動会の組体操で、信仰は夏休みのラジオ体操って感じかな？」

「……あの、全然わかんないんですけど……」

「うん、僕は例え話が苦手だね。ごめん。この天井画も創設者の御園彰の趣味だ。彼はあの欧州最頂でね。魔法使いだったって噂もあるくらいだから、相当入れ込んでたんじゃないかな。——おっと、話が長くなった。これも僕の悪い癖だね。さ、行こう」

「いえ……」

亮介は白い息で煙る天を再び仰いだ。壁の所々に嵌め込まれたスタンドグラスからが惜しみない光が降り注ぎ、亮介の額と頬を暖める。

肉から大地を、血から海を。頭蓋骨からは天を。

それは凄惨であるはずの物語だ。だというのに不思議と嫌悪感は浮かばない。小さい頃に読んだ絵本と再び巡り会った、そんな懐かしさと親しみを感じる。姉のおかげで家の中には女の子が読むような絵本はたくさんあったし、自分が気付かない場所でも多く引用されているのかもしれない。

——絵本。

絵本。そのキーワードが何故か気に掛かる。そうだ、小さい頃、自分は誰かに絵本を貰ったことがあった。ぼろぼろになるまで繰り返しページを捲った。

どうして自分はそこまで熱心にその絵本を読んだのだろう。部屋でおとなしく本を読むような子どもでは、決してなかったはずだ。タイトルは何だったか——。

「そういえば友達から連絡は来たかーい？」

顔を上げると、四宮は玄関ホールを抜け、ずいぶん先の廊下を歩いている。

「えっと……、いや、まだみたい、です！」

慌てて後を追いつつ携帯電話を確認するが、電話着信もメールもないようだ。受信があったときすぐわかるよう、マナーモードを解除する。

帰ったら屋根裏を探してみよう。亮介は思う。手にした絵本の感触とカバーの装丁は何となく覚えているから、きっと見つかる。

——きつと。

保健室は廊下の一番奥、階段の手前であった。玄関ホールがああ通りだったのである程度は予想していたが、保健室というよりはやはり貴族の書斎といった赴きだ。革張りのソファも薬品棚も、おそらく四宮がいつも座っているのだろうデスクも

すべて年月を経た滑らかな餡色をしている。結露で湿ったガラスの向こうには背の低い植え込みが見えた。いつの間にか空は曇り、再び雪がちらつき始めているようだ。親友は大丈夫だろうか。コートの中、亮介は鳴らない携帯電話を握る。赤いホーローのやかんを持った四宮は「ソファへどうぞ」と亮介に声を掛けた。「僕はちょっと給湯室に行ってくるよ。水道管が凍ってるらしくて、シンクがいま使えないんだ。コーヒーしかないけどいいかな？」

「あ、えっと、おかまいなく！」

「遠慮しなくていいよ。それより頼みたいことがあるんだ」

四宮は部屋の奥に視線を投げた。

「眠っている子がいるんだ。立ちくらみを起こしちゃったみたいでね」

促されて覗き込むと、部屋の奥に三つ折りのパーティションが見えた。亮介のいた位置からはちょうど死角になっていてわからなかったが、この部屋はどうやら背の高い大きな本棚によって二つに区切られているようだ。わずかに開いた棚との隙間から、窓際のベッドが膨らんでいるのが見える。

「起こさないようになるべく静かにしてあげてほしいのと、もし起きたら勝手にどこかに行かないよう釘をさしてほしい。心配だからね。僕はすぐに戻るから」

「わかりました」

「よろしく。じゃあ、気をつけてね」

謎めいた注意を残し、四宮は部屋を出て行った。

亮介はマフラーを外し、コートの前を開けて部屋の中央にあるストーヴの前に屈み込んだ。ガードに両手をかざすと、凍えた指先にじんじんと熱が灯る。

本当に来てしまった。

この学校に入学するのだ。改めて実感すると、むず痒いような誇らしいような、言葉で言い表すことのできない気持ちが胸の中で膨れあがる。

御園学園高校は父と母、そして現在は隣の御園大学に通う姉の出身校だ。なので亮介も自然と第一志望校を御園に決めていたのだが、文字通り決めただけだった。

『なあ、前から不思議だったんだけどさ。おまえ中間テストも補習だったし塾も行ってなさそうだし、受験勉強とかしてんのか？』

『全然！』

秋津久志とのつきあいは、こんな会話が切っ掛けで始まった。中学三年の夏、同じクラスだった久志が教室で声を掛けてきたのだ。

それまではクラスメイトといってもほとんど話したことはなかったのだが、夏休みが終わる頃には親友と呼べるような間柄になった。一夏の間に取っ組み合いのケンカから仲直りまでしたのだから、久志にも異論はないと思う。毎日一緒に勉強をして——、というより教えてもらって、本当に毎日と一緒に過ごした。採点の赤ペンがキュッと鳴る音が若干トラウマになってしまった気がしないでもないが、自分がこの学校に合格できたのは、ひとえに全国テスト一位の彼のおかげだ。

そんな久志の父親が御園学園理事会の弁護士をしていることを知ったのはつい先日のもので、二週間後には生徒になるとは

言え、現在は学校関係者ではない自分が見学できるのはそのあたりの関係なのだと思う。

久志とまた同じクラスになれるだろうか。友達は増えるだろうか。勉強についていけるか不安だ。部活は何にしよう。子どもじゃあるまいし、遠足の前夜みたいな気分であるなんて久志に知られたら笑われる。だから昨日の電話では必死に退屈している振りをした。電話越しの様子では、もしかしたら悟られているかもしれないが——。

ばさっ。

何かが落ちる音がして、亮介は顔を上げた。

外の植え込みの雪ではない。もっと近くだ。

ふとベッドのある方角を見ると、パーティションの奥、床の上に何かが落ちているのが見えた。色合いからして制服の上着だろう。同時に、亮介は同じ方向から冷たい風が吹き込んでくることにも気がついた。

まさか窓が開いているのだろうか。

亮介はすぐ腰を上げた。寝ているところを勝手に立ち入るのは良くないが、外は雪だ。そんなものに晒されたら治るものも治らない。

足音は絨毯が消してくれた。スタンドグラスの嵌ったパーティションを越え、上着を拾う。そしてベッドに横たわる人物に

何気なく目を映し——。

亮介は、呼吸するのを忘れた。

眠りに抱かれているのは信じられないくらい美しい人だった。閉じられた長い睫、白い頬、赤い唇。全てが宝物みたいだ。柔らかそうな髪が桜色の耳朶を辿り、華奢な顎に繊細な陰影を添えている。寛いだシャツの襟元から覗く肌は真珠のように滑らかだ。心臓がどくどくと脈打った。隠された宝物を暴いてしまった後ろめたい気持ちと、それをも上回る途方もない喜びとがない交ぜとなって亮介の身を襲った。触れてみたい。足は勝手に枕元へと向かった。触れて確かめたい。この人がここに在ることを、決して幻ではないことを。その瞳の色を知ることができたのなら、もうどうなっただってかまわない。そうして近くで見て初めて、亮介はその人の肌がうっすらと濡れていることに気がついた。雪だろうか。違う。亮介は見た。いま、その表情が悲しげに曇るのを。長い睫が震えて透明な雫を湛えるのを。

『……亮介、』
吹き込む強い風にカーテンが翻った。誰かが自分の名を呼んでいる。母の声だ。緞帳の奥の暗闇で、母が幼い自分の身体を抱きしめている。『亮介、ここから先はあなたが一人で行くの。いいわね?』肩を押されて呑み込まれたのは光の洪水。消えてゆく自分のかたち。

——落ちてゆく。どこまでも落ちてゆく。暗闇から光のただ中へ、逆さになった地上から空へと。沈んだ空の海は消毒液の匂いで満ちている。覗き込んだ水底は鏡だ。そこにもう一人の自分がいた。真っ白な部屋、真っ白なカーテン。絵本を差し出す誰かの手。

『大きくなったらまたおいで。それまでこの子は眠り続けるだろう。いばらの棘に、深く深く守られて——』

亮介は震える手を伸ばし、寝台の上、白い頬を流れる涙を人差し指で掬った。触れた肌は温かい。息をしている。とても嬉しい。言葉にならないほどに——。

リ——ン、リ——ン、リ——ン。

ポケットの中から電子音が鳴り響き、亮介はふと我に返った。夕陽と同じ色をした大きな瞳の中、間抜けな顔をした自分が映り込んでいる。

「ふざけるな」
「へ？」
息づかいを感じるほど近くににいることに、亮介はようやく気がついた。

いつの間に。どうして。自分はいま一体何を？
混乱でうまく働かない頭に衝撃が走ったのは次の瞬間だった。

パキッ。
妙な音がしたと思った次の瞬間、ぐらりと視界が揺れ、足が縫れた。そうして床の上に倒れ、火花が散る視界に天井の火災感知器を認めてようやく、亮介は今の自分の状況を理解した。

思いっきり左頬を殴られたのだ。
「へえ、けっこう素早いな、おまえ」
ベッドから降りたその人は亮介の身体にひょいと跨ると、襟ぐりを無遠慮な力で掴み上げた。
「鼻の骨折ってやろうと思ったのに。おい聞いているか？ ひょっとして耳がイカれたかこの変態」
揺さぶられながら、亮介はにわかに信じられない光景に呆然と目を見開いた。いま、この人が自分を殴り、且つ罵ったのか。銀のスプーンとフォークしか持ったことがなさそうな手で、悪魔だって聞き惚れてしまいそうな美しいこの声で？
「じゃあお揃いで右も殴ってやらなきや平等じゃないよな。悪いが利き手じゃないから、うっかり別のところ殴るなんてこともあるかもしれないから、最初に謝っとくな。ごめんな変態。おとなしく死ね」
可憐な唇から変態だの死ねだのという言葉がぼんぼん飛び出してくると、外国の砂糖菓子の名前に聞こえるから不思議だ

——それにしても。
「へ、変態って……。あの、俺には犬飼って名前が」
「変態だ。おまえ、俺を知らないってことは今度入ってくる一年だろう。先輩が有り難いお話をしてやる。いいかおまえは変態だ。おまえが襲おうとしたのはな、俺は、立派な男なんだよ！」
激昂と共に再び拳が降ろされる。亮介は目をぎゅっと閉じて叫んだ。

「知ってる！」
覚悟していた衝撃は来なかった。恐る恐る目を開けると、彼は握った拳をそのままに、困惑した表情で自分を見下ろしている。

「知ってるって、何がだ。俺はおまえなんか知らない」
「じゃ、なくて。わかる。見ればわかります、男だってことくらい。それより、あの、——大丈夫？」

「何がだ」
言うべきかどうしようか迷ったが、亮介は結局、再び彼に手を伸ばした。頬に指を置くと、華奢な肩がかわいそうなくらい驚きに震えた。

やめてあげられなかった。欲望に負けた。もう一度触れたかった。
「泣いてたから」
涙に濡れた頬を親指で拭うと、眉間から剣呑な色が消えた。次いで白い頬に薔薇色が差し、瞳が恥じらいに潤む。

「あの、先輩。俺……っ！」
奥歯はぎゅっと噛み締められ、肩は震え、拳は今一度握られ、そして——。

「~~~~~っ！」
ドゴッ。

再びの衝撃に、亮介は今度こそ沈黙した。
「ただいまー。あれ、御園君起きたんだ」
「お世話になりました。もう大丈夫です。帰ります」
「それは良かった。ところでもう一人男の子がいたと思うんだけど……」

「さあ、人間には会いませんでした。駄犬のしつけならしましたけど」
遠ざかる声、乱暴に閉まるドア。床に転がった携帯電話から親友の声が聞こえる。

『亮介、おまえいま一体どこにいるんだ。亮介？』

いばら姫-WORLD END FAIRY TALE- (試し読み版)

製品版は3月頃のリリース予定です。

挿絵を追加した冊子版は同人イベント・専門書店へ委託予定となります。

公式サイト

<http://www.weft.jp/>

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/weft/profile>

感想はこちらのコメントへ：<http://p.booklog.jp/book/44377>

ブックログのpapier本棚へ入れる：<http://booklog.jp/puboo/book/44377>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.